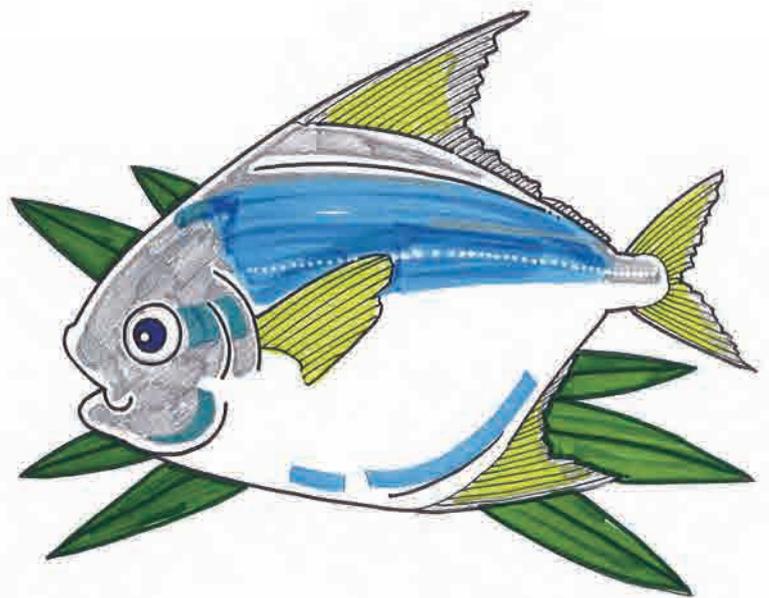


目次

- 1 はじめのうた
- 2 季節のカード (草木編)
- 3 童謡 木の葉
- 4 早口ことば 京の生まながつお
- 5 今月の詩 一つのメルヘン 中原中也
- 6 たし算 8の段
- 7 ことわざ 知らぬが仏 藪をつついて蛇を出す 好きこそ物の上手なれ
過ぎたるはなお およばざるがごとし
捨てる神あれば拾う神あり
- 8 かけ算 9の段
- 9 俳句 内藤鳴雪 与謝蕪村 野沢凡兆
- 10 かぞえうた 5個 10個 15個 (いちご)
- 11 なぞなぞ
- 12 手あそびうた おはぎ
- 13 今月のうた 江戸時代の商業
- 14 四字熟語 一触即発 栄枯盛衰 我田引水
- 15 イメージトレーニング クロス君 (第8話 桃太郎の時代)
(イメージしてみましょう)
- 16 おはなし 赤ずきんちゃん
- 17 漢詩 子夜呉歌
- 18 百人一首 伊勢 素性法師 能因法師 三条右大臣
- 19 復習コーナー
- 20 暗示 (静かなところで目を閉じて聞きましょう)

早口ことば

きょう なま
京の生まながつお



ひと
一つのメルヘン

なかはらちゅうや
中原中也

あきよの夜は、はるかかなたに、
こいしばかりの、かわらがあつて、
それにひは、さらさらと
さらさらと射してゐるのであります。

ひ陽といつても、まるでけいせきなにのやうで、
ひじょうなこたいふんまつのやうで、
さればこそ、さらさらと
かすかな音をたててもゐるのでした。

さてこいしうえに、いまひとつのちようがとまり、
あわ淡い、それでゐてくつきりとした
かげを落とすのでした。

やがてそのちようがみえなくなると、いつのまにか、
いままでながいなかつたかわどこみず
さらさらと、さらさらと流れてゐるのであります……



ことわざ

知らぬが仏

知ればこそ腹も立つが、知らなければ仏のように穏やかでいられる。または当人だけが知らずに平気でいること。



藪をつついて蛇を出す

よけいなことをして、かえって思わぬ災いを受けること。



好きこそ物の上手なれ

自分の好きなことは、何事も熱心にやるから上達するものである。



過ぎたるはなおおよばざるがごとし

何事もやりすぎることは足りないのと同じようにいけない。



捨てる神あれば拾う神あり

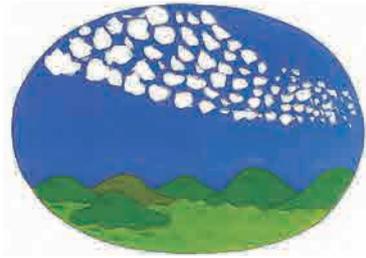
世の中、見捨てる神もいれば、救ってくれる神もいて、運命は神まかせである。



俳句

あき くも 秋の雲 ちぎれちぎれて なくなりぬ

ないとう めいせつ
内藤鳴雪



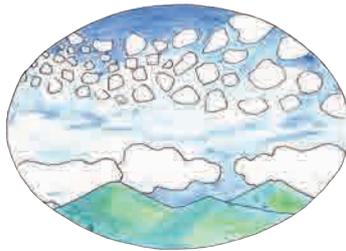
しごにん 四五人に つきお 月落ちかかる おどりかな

よさぶそん
与謝蕪村



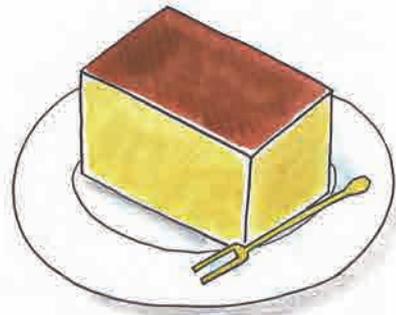
うえゆ 上行くと したく 下来る雲や あき そら 秋の空

のざわ ほんちよう
野沢凡兆



なぜなぜ

- 1 はしはしでも、鳥とりが持もっているはしはなあに？
- 2 てらはてらでも、食たべられるてらはなあに？
- 3 くびはくびでも眠ねむくなると出でてくるくびはなあに？
- 4 カメはカメでもなんでもうつしちゃうカメはなあに？



《おはぎ》

- ① おはぎがおよめに
ゆくときは



手でにぎるまねを
する

- ② あんこと きなこで
けしょうして



ひだり手をかがみにして
みぎ手でかおをポンポンとたたく

- ③ まるいおぼんに



腕でわをつくる

- ④ のせられて



手のひらを上にして
ひらく

- ⑤ ついたところが



4かい、手をたたく

- ⑥ おうせつ



- ⑦ ま



かた手ずつ、
むねにあてる

《江戸時代の商業》

ちほう だいまよう えど おおさか おく ねんぐまい こくさんひん
地方の大名 江戸や大坂に せっせと送る 年貢米や国産品

かいじょうこうつう りよう ひがしまわ にしまわ かわむらずいけん せいび
海上交通利用して 東廻りと西廻り 河村瑞賢 整備した

おおさか えど あいだ ひがきかいせん たるかいせん
大坂と江戸の間は 菱垣廻船 樽廻船

くらやしき はこ かね
蔵屋敷に 運ばれたものは お金にかえよう

くらもの くらもと かんりはんばい かけや だいきんほかん
蔵物は 蔵元 管理販売し 掛屋が代金保管

ふださし はたもと ごけにん ろくまい
札差は 旗本 御家人 もらった禄米を

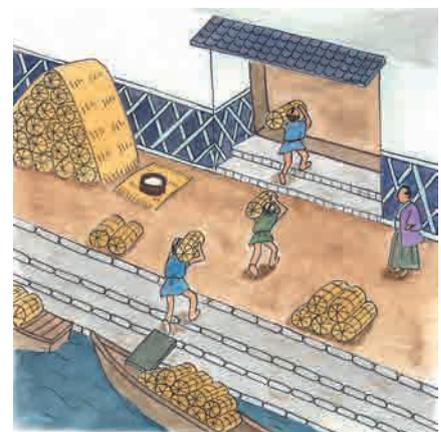
ばいきやく だいまようがし
売却したり 大名貸をおこなって

しこたまもうけた しょうにん
しこたまもうけた 商人たち

かへい こうかん りょうがえしょう ぎんこう
貨幣の交換 両替商は 銀行だ



菱垣廻船



蔵屋敷

いっしょくそくはつ
一触即発

ちょっとしたことで大^{たい}変^{へん}になりそうな危^き険^{けん}な状^{じょう}況^{きょう}に
いること。



えいこせいすい
栄枯盛衰

栄^{さか}えたり衰^{おとろ}えたりすること。

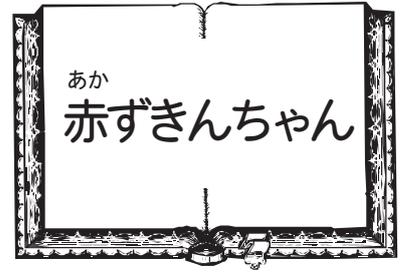


がでんいんすい
我田引水

自^じ分^{ぶん}に都^つ合^{ごう}の良^よいよう^いに物^{もの}事^{ごと}を考^{かん}えたり行^{おこ}ったり
すること。



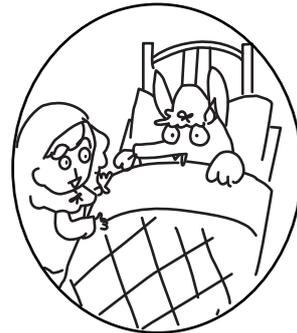
おはなし



「赤ずきんちゃん」は、赤いずきんをかぶった女の子とオオカミのお話です。

お話を聞いた後で、質問にこたえてみましょう。

- 1 赤ずきんちゃんは、おばあさんに何と何を届けるように言われましたか。
- 2 「道草をしないように」とお母さんが言ったのに、赤ずきんちゃんはどうしましたか。
- 3 赤ずきんちゃんが道草をしている間に、おばあさんはどうなってしまったのでしょうか。
- 4 赤ずきんちゃんの「なんて大きな耳でしょう。」という質問には、何と答えましたか。
- 5 赤ずきんちゃんが「なんて大きな口！」というど、何と答えましたか。
- 6 誰が通りかかり、二人を助けましたか。
- 7 オオカミは、どうなりましたか。



子夜呉歌

李

白

長安ちやうあん 一片いっぺん の月つき
 万戸ばんこ 衣ころも を擣う つ声こえ
 秋風しゅうふう 吹ふ き尽つ くさず
 総す べて是こ れ 玉関ぎよくかん の情じよう
 何い れの日ひ か 胡虜こりよ を平たい らげて
 良人りやうじん 遠征えんせい を罷や めん



百人一首

難波瀉なにながた

短みじか逢あはでこの世よを過すぐしてよとや

(伊勢)

今来むといまこむん

有明ありあけの月つきを待まちち出いでつるかな

(素性法師)

嵐あらし

三室みむろ

竜田たつたの川かわの錦にしきなりけり

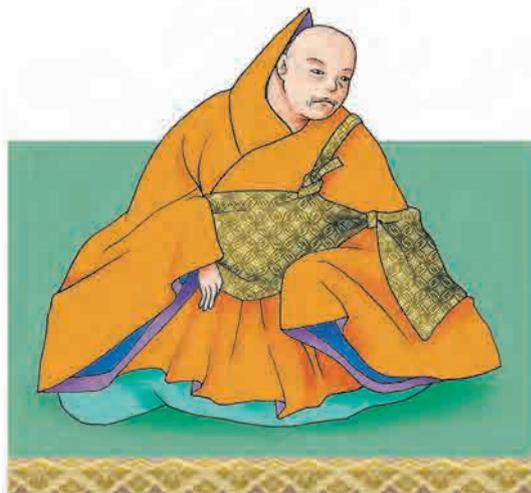
(能因法師)

名な

逢坂おうさか

人にひと知られでくるよしもがな

(三条右大臣)



素性法師